

二〇二〇年度 聖ドミニコ学園中学校入学試験（第一回）

# 国語 50分

◎ 次の注意事項（しごとう）を読んでください。

- 1 試験開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 2 問題は全部で10ページあります。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさんであります。
- 4 解答用紙に受験番号、氏名を書いてください。
- 5 答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 6 字数は、句読点（くつうてん）や「」など記号もすべて一字に数えます。

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題作成の都合上、本文を一部改変しています)

「スロー・リーディング」とは、一冊の本にできるだけ時間をかけ、ゆつくりと読むことである。鑑賞の手間を惜しまず、その手間にこそ、読書の楽しみを見出す。そうした本の読み方だと、ひとまずは了解してもらいたい。スロー・リーディングをする読者を、私たちは、「スロー・リーダー」と呼ぶことにしよう。

一冊の本を、①カチあるものにするかどうかは、読み方次第である。1、海外で見知らぬ土地を訪れることをイメージしてみよう。出張で訪れた町を、空き時間のほんの一、二時間でザッと見て回ると、一週間滞在して、地図を片手に、丹念に歩いて回るとでは、同じ場所に行ったといつても、その理解の深さや印象の強さ、得られた知識の量には、大きな違いがあるだろう。旅行は、行ったという事実の意味があるのではない(よくそれを自慢する人もいるが)。行って、どれくらいその土地の魅力を堪能できたかに意味がある。

A 読書もまた同じである。ある本を速読して、つまらなかった、という感想を抱くのは、忙しい旅行者と同じかもしれない。じっくり時間をかけて滞在した人が、「えっ、あそこにすごくおいしいレストランがあったのに！ 行かなかったの？ あそこ②ケシキは？ えっ、ちゃんと見てないの？」と驚き、不憫に感じるのと同じで、スロー・リーダーが楽しむことのできた本の中の様々な仕掛けや、意味深い一節、絶妙な表現などを、みんな見落としてしまっている可能性がある。速読のあとに残るのは、単に読んだとい

う事実だけだ。スロー・リーディングとは、それゆえ、得をする読書、損をしないための読書と言いつてもいいかもしれない。

丁寧(ていねい)に本を読むという意味では、昔から、「熟読」、「精読」といった言葉があるが、スロー・リーディングは、そうした読書態度を包括するものとして理解してもらえればよいだろう。その方法の一つとして、たとえば本書では、B 書き手の視点で読む、書き手になつたつもりで読む、という読み方を紹介している。

私がこの読書法をおすすめしたいのは、私自身が、作家になる前となった後とでは、本の読み方が変わってきたこと、それによって本に対する理解が深まったことを実感しているからである。中学、高校時代に、単に一読者として小説を読んでいた頃には気がつかなかった様々な仕掛けや工夫に注意を払うようになってから、私は改めて、読書は面白いと感じるようになった。そして、私だけではなく、実は作家の多くは、他人の本を読むときにも、やはり書き手の視点で読む、という作業を行っているのである。

推理小説が好きな人は、最後の謎解きのための「伏線」に注意しながら本を読む習慣があるだろう。年季の入った愛好家は、そうした伏線のパターンをたくさん知っているから、次第に最後まで読まざとも、結末が読めるようになってくるものである。

推理小説というジャンルに明瞭に見て取れる伏線は、実は、他のジャンルの小説にも様々に張り巡らされており、それだけでなく、論文やエッセイの中にも、大抵、仕込まれているものである。一般的に、推理小説以外のジャンルでは、謎解きが読書の最終的な到達点ではない。だから、ここでいう伏線も、必ずしも、具体的な結末に結びつくものではなく、作者が読者に訴えたいことだとか、登場

人物の繊細な感情の動きだとか、そういったプロットとは関係のないことを準備する場面がある。前の場面で、登場人物が見せたちょっとした③仕草が、次の場面での言動の意味を左右する、といったように。こうした伏線は、見落としてしまったとしても、推理小説の謎解きのように、小説がそこから先へは進めないということには必ずしもならない。2、速読の際には、しばしば見落とされてしまうのである。

しかし、読書を今より楽しいものにしたと思うなら、まずはそうした、書き手の仕掛けや工夫を見落とさないというところから始めなければならぬ。ア

作家のタイプにもよるが、たとえば、三島由紀夫などは、様々な技巧に非常に自覚的な作家だったので、スロー・リーディングすると、ここまで気をつかうのか！ というほど、細かな仕掛けがいくつも見えてくる。3、その多くは、実はほとんどの読者に気づかれないまま、埋蔵金のように（今も小説のイタるところに眠っている）のである。

私自身も、もちろん、小説を書くときには、人に話せば笑われるほど、実は些細な点にまでいろいろな工夫を施している。そんなことは単なるXじゃないかと言う人もいるかもしれない。しかし、読者からの感想を読んでいると、ちゃんとそれに気がついてくれ、その分、深く小説を理解し、楽しんでくれる人たちが必ずいるのである。逆に、スロー・リーディングしてもらえれば、十分に理解できるはずの事柄が読み落とされてしまっているときには、やはり寂しい気持ちになる。イ

そう、書き手はみんな、自分の本をスロー・リーディングしても

らう。ゼンテイで書いているのである。

書店に足を運んで、日々、洪水のように押し寄せる新刊本の波に呆然とする経験は、誰にでもあるだろう。今なら、アマゾンの広告メールなどでも、新刊情報は絶えず手もとに届けられている。一体、何を読んで、何を読まなくていいのか、さっぱり分からない。選択の可能性が増えたといっても、手に負える限度というものがある。

ウ 私たちは、数十年前に比べて、はるかにヨウイに、はるかに多くの本を手でできるようになった。しかし、そのおかげで、私たちがかつての人間よりも知的な生活を送っていると言うことができるだろうか？ どうも、そうでもなさそうである。エ

グーテンベルクによって活版印刷キジュツが発明されるまで、書物は当然、手書きであり、それだけに貴重品で、そもそも一般にはほとんど流通していなかった。それでも、当時の人たちは、その少ない情報だけを手がかりにしながら、今日にも通じるような深い思索を行っている。カントやヘーゲルが生涯にドクハした本の冊数が、今から考えればイガイなほど少なかったからといって、彼らを無知で愚かな人間だと言う人はいないだろう。オ

本に限らず、たとえば、音楽の世界でも同じことが言える。ジャズ・ミュージシャンのマイルス・デイヴィスは、子供の頃にはレコードをほとんど持っていなかったらしい。音楽は、ナマエンソウか、ラジオで聴くしかなかったわけだが、それを言うなら、二〇世紀以前のクラシックの音楽家たちは、バッハでも、モーツァルトでも、彼らが生涯に聴くことができた曲の数というのは、ごくごく

限られたものであったはずだ。今のクラシック・マニアの何十分の一、何百分の一程度だったかもしれない。

では、現代はどうだろうか？ 身近な友人が、プロのミュージシャンになりたいと言いつ出したとする。その彼が、「ただCDは三枚しか持っていないません」と言つたとしたら、誰でも、「おまえ、ちよつとアタマ冷やせ」と言いたくなるだろう。私たちは、ともかくも、手に入る情報を一通り揃えておかなければ、何もできないというような世界に生きている。しかし、そうした時代の文学や音楽が、その分、質的に豊かになつたかといえ、誰もが答えに戸惑うだろう。

かつての人間たちは、要するにみんな、スロー・リーダーであり、スロー・リスナーだったのである。

個人的な経験からしても、中学や高校時代には、そもそもお金の余裕がなかつたから、月の初めに小遣いをもらつて、欲しかった本とCDとを買えば、財布はすぐにスカラカンになつて、あとは翌月まで、ひたすら同じ本を読み、同じCDばかりを聴いていた。しかし、そうした頃に出会つた小説や音楽は、細部まで今でもはつきりと覚えていて、自分に非常に大きな影響を与えたものとして特別な愛着を感じられる。

しかし、大人になつて一度に二〇枚ものCDを買ひ、スキップしながらざつと聴き飛ばしてしまつたようなアルバムや、必要に迫られて、つい速読してしまつたような本の中には、ほとんどマトモに内容も覚えていないようなものもある。これは無意味であるという以上に、なんとなく寂しいことだ。

私たちは、どうやつても **C** かつての世界には戻れない。これは事

実である。そして、これからも、恐らくは今以上に大量の情報に囲まれながら生活してゆくことだろう。私たちは、そのすべてを網羅する必要はないし、すべてを網羅することは不可能である。もちろん、いろいろなタイプの本を読むことは大切である。自分だけの趣味に固執し、今の自分を肯定してくれるような本ばかり読んでいては、ますます視野を狭めていってしまうことになる。しかし、読書量は、自分に無理なく読める範囲、つまり、スロー・リーディングでできる範囲で十分であり、それ以上は無意味である。

私たちは、情報の恒常的な過剰供給社会の中で、本当に読書を楽しむために、「a」の読書から「b」の読書へ、網羅型の読書から、選択的な読書へと発想を転換してゆかなければならぬ。

(平野啓一郎『本の読み方 スロー・リーディングの実践』)

問一 〓線①「カチ」、②「ケシキ」、③「仕草」、④「イタ(る)」、

⑤「ゼンテイ」、⑥「ヨウイ」、⑦「ギジュツ」、⑧「ドクハ」、  
⑨「イガイ」、⑩「ナマエンソウ」のカタカナは漢字に直し、  
漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二

1 3 に入る適当な言葉を次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア なぜなら イ たとえば ウ だから  
エ ところで オ しかし



問九 次の会話は、本文を読んだAさんからHさん八人のやりとりです。この中で**本文の内容に合わない**ことを言っている人を二人選び、A～Hの記号で答えなさい。

Aさん「スロー・リーディングは一冊の本にできるだけ時間をかけて、ゆっくり読むことなんだね。」

Bさん「だから、本の中にある意味深い一節や絶妙な表現を読み取ることができるとだね。」

Cさん「なるほど、スロー・リーディングは得をする読書だと言えるね。」

Dさん「でも、速読だって得する読書方法だよ。たくさんの本を読むと最後まで読まなくても結末が分かるようになるからね。」

Eさん「現代のように多くの本が手に入れば、知識が増えて知的な生活を送れるからすばらしいね。」

Fさん「でも、自分の趣味に合った本ばかり読んでいると、視野を狭めることになってしまう危険もあるよ。」

Gさん「作家はどうなのかな。読者にスロー・リーディングしてほしいと思うて書いてはるはずだよね。」

Hさん「そうだね。技巧を凝らす作家は読者がそれに気づいてくれないのは寂しいんじゃないかな。」

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

《二》までのあらすじ》小学六年生のめぐ美は、カナ、まやまや、リッチーの四人組で仲良しグループを作っている。カナはダンスを習っており、ダンスの公演を観に来てくれないかと三人に頼んだが、めぐ美以外の二人はそれを断った。次の日の休み時間、めぐ美はまやまやとリッチーにこっそり呼び出された。

「あのね、めぐ」

まやまやが囁くような声で、ぐっと顔を近づけてきた。

「カナのダンスの公演のこと」

「ああ……うん」

「詐欺だよね」

と、まやまやが言った。

「え」

「お金かかるって後から言ってくるなんてさ。ひどいと思った」

まやまやの言葉を受けて、

「ホント、詐欺師」

リッチーも言う。

ふたりがカナに、寝返るかもしれないとはらはらしていためぐ美は、Y 拍子抜けすると同時に、X 繰り返された言葉たちに呆然とした。

「ごめんね、わたしたちだけダンス公演行けなくて。てか、今後永遠に行かないし」

「それな」

「カナ系を全部めぐに押しつけたみたいなき感じになっちゃって」

ふたりは、いつもと同じ笑顔で笑っている。いつもと同じ笑顔なのに、知らないまやまやと、知らないリッチーがいた。居心地の悪さにめぐ美は伏し目になる。その様子を見て、

「めぐが優しいから、いい気になってるんだよ」

「ほんと、めぐ、優しいから」

ふたりは口々に言った。①「見褒め言葉のようだけど、笑いを含んだその「優しい」は、めぐ美をばかにしているようにも聞こえた。

「あの人、ひとの気持ち、考えられないからね」

「それな。うちらが平和 シュギだから良かったけど、中学入ってからが③カクジツにやばい」

「やばい、やばい。カクジツにいじめられる。もう、マジ、未来見える」

「今だって、果歩や裕奈たちドン引きしてるもんね」

「でも」

とめぐ美は口を挟む。

「まやまや、受験して私立に行くんでしょ」

そう言うと、まやまやは頬を硬くし、

「なんで？」

と、攻撃的に語尾を跳ね上げた。

「なんでって、カナが、まやまやは一月に入試があるからダンスに來れないって言ってたよ」

めぐ美が言うと、まやまやは気まずそうに黙る。リッチーはすでに知っていたようで、驚くそぶりを見せない。やっぱり、まやまやとリッチーは、Aふたりに小さな世界をつくっているのだなとめ

ぐ美は思う。その世界の中では、カナは a 者に、自分は b

者に、そう見えているんだな。

「でもカナはそのこと、怒ってないよ。それに、リッチーのことも、お父さん厳しいし、空手大変だって言ってた」

めぐ美の言葉を聞き、リッチーはさつきまでの勢いを失って押し黙る。しかしまやまやは、

「受験するって言っても、わたしの場合、別に、塾のガチ勢みたいにたくさん受けないから、五中になっちゃう可能性が高いし、あんまりみんなに言っただけだけど、受けるのも、ほんと無理ってところだけだし」

早口になって、ずつと受験の言い訳している。なんでこんなに動揺するのか分からなかった。私立の学校に落ちて五中になったと思われなくて、④ヨボウ線をはっているのだろうか。五中に「なっちゃう」。ヨボウ線をはられれば、はられるほど、五中以外に行くところのない自分たちとの間に、線を引かれている気がした。

「ていうか、まさかカナの悪口言うためにわたしのこと呼び出したの？ もういいよ。そろそろカナが怪しむよ」

めぐ美が明るく言うと、リッチーが、

「違う違う」

と慌てたようにまやまやをつつく。まやまやが、そうだった、というふうにはリッチーに小さく頷いてから、ジャンパーズスカートのポケットに手を入れて、

「これ……」

と、何やら小さな袋を出した。

「あげる」



リッチーとまやまやがカナの悪口を言いまくっていたことを話したら。さすがのカナも泣くかもしれない。リッチーとまやまやは、仕返しに、注②「タピル」に書いためぐ美の言葉を見せるだろう。四人は空中分解し、新しい友達を見つけることに躍起<sup>やつき</sup>になって、あちこちで悪口を言い合う。ほんの一言で、わたしたちは、⑨ カンタンに壊れる。

でも、そんなことは関係なかった。

カナに、言うわけないじゃん。

自分がひとりぼっちになるのが厭だからというだけではなく、カナに聞かせたくないと思った。

あんなに毎日頑張<sup>がんば</sup>ってダンスの練習をしているカナに、ふたりの言葉を聞かせたくない。

カナが聞いたらどう思うのか考えると、めぐ美は、なんだか自分が厭<sup>いや</sup>なことを言われたような気にさえなった。自分も「タピル」にカナのことを悪く書いたりしているのに、カナの強引<sup>きやういん</sup>さに不満を持つこともあったのに、どうしてこんな気持ちになるのか分からなかった。

「ありがとうね。わたしのこと、心配してくれて」

リッチーとまやまやに、笑顔<sup>えがお</sup>をつくった。

「ふたりとも超優<sup>ちやうやん</sup>しい！ 大好き！」

いつものめぐになる。明るい声を出す。

リッチーとまやまやは、めぐ美の表情にほっとしたようにようやく頬<sup>ほお</sup>を緩<sup>ゆる</sup>ませ、顔を見合わせて、自分たちの善行に「えへ」とテ<sup>⑩</sup>れた。

(朝比奈あすか『君たちは今が世界』<sup>すべて</sup>)

注1 藤岡——めぐ美のクラスの担任の先生。

注2 「タピル」——カナ以外の、めぐ美・まやまや・リッチーの三人で会話しているスマホのトークルーム。

問一

——線①「二見」、②「シユギ」、③「カクジツ」、④「ヨボウ」、⑤「コンラン」、⑥「街」、⑦「昨晚」、⑧「態度」、⑨「カンタン」、⑩「テ(れた)」のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二

——線X「寝返る」、Y「拍子抜けする」、Z「線を引かれている」について、本文での意味として適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア

体の向きを変える

イ 裏切つて敵になる

ウ

緊張が急になくなる

エ 遠ざけられる

オ

顔色が悪くなる

問三

——線A「ふたりで小さな世界をつくっている」とありますが、その説明として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア

カナを喜ばせようと考えている。

イ

ふたりだけでよく話をしている。

ウ

協力して短い小説を書いている。

エ

いっしょに受験勉強をしている。



